

# Contents

1 序章	3
2 綿羊	5
3 花儿	8
4 第四章	10
5 第五章	12
6 第六章	14
7 第七章	15
8 第八章	18
9 第九章	20
10 第十章	22
11 第十一章	26
12 第十二章	28
13 第十三章	29
14 第十四章	32
15 第十五章	35
16 第十六章	38
17 第十七章	39

<i>CONTENTS</i>	2
18 第十八章	41
19 第十九章	42

# Chapter1 序章

六歳さいの時とき僕は、たいけん「体験談」という原生林げんせいりんについて書かかれた本ほんで、素晴すばらしい挿絵さしえを見たことがある。それは大蛇だいじゃのボアが猛獣もうじゅうを飲のみ込こもうとしている絵えだった。本ほんにはこんな説明せつめいがあった。

ボアは獲物えものを噛かまずに丸まるごと飲のみ込こみます。すると動うごけなくなるので、獲物えものを消化しょうかする半年はんとしもの間あいだ、ずっねむと眠すって過すぎします。

僕はジャングルでの冒険ぼうけんについていろいろと考かんがえ、自分じぶんでも色鉛筆いろえんぴつを使つかって、生まれて初はじめての絵えを描かき上あげた。その傑作けっさくを大人おとなたちに見みせ、怖こわいかどうか聞きいてみた。すると、こんな答こたえが返かえってきた。

どうして帽子ぼうしが怖こわいんだい？

帽子ぼうしの絵えなんかじゃなかった。ゾウを消化しょうかしているボアを描えがいたのだ。でも、大人おとなにはわからないらしいので、今度こんどはボアの内側うちがわの絵えを描かいてみた。大人おとなには何時なんじだって説明せつめいが必要ひつようなのだ。僕の二番目にばんめの絵えでは、ちゃんとボアの中なかにいるゾウが見みえていた。しかし大人おとなたちは中なかが見みえようが見みえまいが、ボアの絵えは片付かたづけて、地理ちりや歴史れきし、算数さんすうや文法ぶんぽうの勉べんきよう強きようをしなさいと、僕ぼくを嗜たしなめた。

こうして、6歳さいにして僕は偉大いだいな画家がになるという夢ゆめを諦あきらめた。作品第一号さくひんだいごうと第二号だいごうが共に不評ふひようで、気持きもちが挫くじけてしまったのだ。

大人おとなというのは、自分たちとは全まったく何なにもわかっていないから、いつも子供こどもの方が説明せつめいしてあげなさいけなくて、うんざりする。僕は別べつの仕事しごとを選えらぶ必要ひつように迫せまられて、飛行機ひこうきの操縦士そうじゅうしになった。そして、世界せかい中じゅうをあちこち飛とび回まわった。地理ちりは確たしかに役やくに立たった。僕は一目ぼくで中ひとめ国ちゅうごくとアリゾナみわを見分ことける事ことができる。夜間飛行やかんひこうで迷まよった時ときなど、そういう知識ちしきがあると本ほん当とうに助たすかる。

これまでの人生じんせいで、僕はたぼくくさんの重じゅうよう要人物じんぶつと知しり合あった。随分ずいぶん多おおくの大人おとなたちと一いっしょ緒くに暮みらしたし、マジカまじかにも見みてきた。それでも僕ぼくの考かんがえはあまり変かわらなかつた。僕は物分ものわかりのよさそうな人ひとに出会であった時ときには必かならず、肌はだに離はなさず持もち歩あるいていた作品第一号さくひんだいごうを見みせ、実験じっけんしていた。その人ひとが本ほん当とうに物事ものごとの分わかる人ひとかどうか、

し  
知りたかったから。でも、<sup>こた</sup>答えはいつも<sup>おな</sup>同じだった。

<sup>ぼうし</sup>  
帽子だね。

<sup>あとぼく</sup>その後僕は<sup>はなし</sup>ボアの<sup>はなし</sup>話も、<sup>げんせいりん</sup>原生林の<sup>はなし</sup>話も、<sup>ほし</sup>星の<sup>はなし</sup>話もしなかった。<sup>はなし</sup>話を<sup>あ</sup>合わせて、  
<sup>せいじ</sup>ブリッジやゴルフや、<sup>はなし</sup>政治やネクタイの<sup>はなし</sup>話を<sup>おとな</sup>した。するとその大人は<sup>はなし</sup>話が<sup>わ</sup>分かる<sup>あいて</sup>相手  
と<sup>し</sup>知り<sup>あ</sup>合<sup>い</sup>えたと<sup>よろこ</sup>言<sup>ぶ</sup>って喜<sup>ぶ</sup>のだ。

## Chapter2 綿羊

こうして僕は、六年前、サハラ砂漠で飛行機が故障するまで、心を許して話せる相手に出会う事もなく、一人で生きてきた。飛行機はエンジンのどこかが壊れていた。整備士も、乗客も乗せていなかったの、僕は難しい修理の仕事を一人でやり遂げるしかなかった。

死活問題だった。飲み水は一週間分あるかないかだった。

最初の夜、僕は、人の住む場所から千マイルも離れた砂の上で眠った。大海原を筏で漂流する遭難者より、ずっと孤独だった。だから、夜明けに小さな可愛らしい声で起こされた時、僕がどんなに驚いたか想像してみしてほしい。その声は、こう言った。

お願い、羊の絵を描いて。

えっ？

羊を描いて。

雷に打たれたみたいに飛び起きると、目を擦って辺りを見回した。そこには、とても不思議な子供が一人いて、僕を真剣に見つめていた。僕は突然現れたその子供を、目を丸くして見つめた。何度も言うけれど、人の住む所から千マイルも離れていたのだ。しかしその子は道に迷っているようには見えなかった。疲れや餓えや渇きで死にそうになっているようにも、怖がっているようにも見えなかった。人の住む所から千マイルも離れた砂漠の真ん中にいながら、途方に暮れた迷子といった様子は少しもなかったのだ。

ようやく口が聞けるようになると、僕はその子に尋ねた。

君はこんな所で何をしているの？

しかしその子はとても大切な事のように、静かに繰り返すだけ。

お願い、羊の絵を描いて。

バカげた話だが、人の住む所から千マイルも離れて、死の危険にさらされているというのに、僕はその子に言われるままに、ポケットから一枚の紙切れと万年筆を取

だ  
り出してた。

だけどそこで、僕が一生懸命勉強してきたのは、地理と歴史と算数と文法だけだった事を思い出して、少し不機嫌になりながら、絵は描けないんだと、その子に言った。

そんなの構わないよ。羊を描いて。

僕は羊の絵なんか描いたことはなかったので、自分に描けるたった二つの絵の内  
の一つを描いてあげた。ボアの外側の絵だ。その時男の子がこういうのを聞いて、僕はびっくりした。

違う、違う、ボアに飲み込まれたゾウなんていないよ。ボアはとっても危険だし、ゾウは結構場所塞ぎだから。僕の所はとっても小さいんだ。欲しいのは羊、羊を描いて。

そこで僕は羊を描いた。

ううん、駄目だよ。この羊はひどい病気だ。違うのを描いて。

僕は描き直した。男の子は僕を気遣って優しく微笑んだ。

よく見て。これは羊じゃないでしょう。雄羊だよ。角があるもの。

そこで僕はまた描き直した。けれどそれも前の二つと同じように拒絶された。

この羊は年を取りすぎてるよ。僕、長生きする羊が欲しいの。

我慢も限界に近付いていた。修理を始めなければと焦っていた。僕はざっと描き殴った絵を男の子に投げ渡した。

これは羊の箱だ。君が欲しがっている羊はこの中にいるよ。

すると驚いたことに、この小さな審査員の顔がぱっと輝いたのだ。

ぴったりだよ。僕が欲しかったのは、この羊さ。ね、この羊草をいっぱい食べるかな。

どうして？

僕の所はとっても小さいから。

大丈夫だよ。君にあげたのは、とっても小さな羊だからね。

そんなに小さくないよ。あれ、羊は寝ちゃったみたい。

こうして<sup>ぼく</sup>僕は<sup>ちい</sup>この<sup>おうじ</sup>小さな<sup>し</sup>王子<sup>あ</sup>さまと知り合いになった。

## Chapter3 花兒

王子さまがどこから来たのか分かるまで、かなり時間がかかった。王子さまは僕にはたくさん質問をしてくるのに、こちらからの質問にはほとんど耳を貸さなかったのだ。

少しずつ全てが明らかになっていったのは、王子さまが偶々口にした言葉からだった。それは初めて僕の飛行機を見た時の事だ。

なに？ これ。

飛行機。空を飛ぶんだ。僕の飛行機さ。

空を飛べると自慢げに話していたら、王子さまは大声で言った。

えっ？ じゃ、君は空からおっこちてきたんだ。

まあ、そうだな。

ああ、それはおかしいね。

王子さまは可愛い声で笑い出したが、僕はかなりいらいらした。自分を襲った災難を真面目に受け取って欲しかったのだ。しかし王子さまは続けてこう言った。

それじゃあ、君も空から来たんだね。どの星から来たの？

その瞬間、王子さまがなぜここにいるのかという疑問にさっと光が差し込んだように感じて、僕はすぐに尋ねた。

君はよその星から来たのかい？

しかし王子さまは答えず。飛行機を見て、そっと首を振っただけだった。

これに乗って来たのなら、そんなに遠くからじゃないよね。

そう言うと、物思いに沈んでいった。王子さまはポケットから羊の絵を取り出して、大切そうに眺めていた。

君はどこから来たの？ その羊をどこへ連れて行くつもりなの？

この箱がいいのはね、夜になると、羊の小屋になるってところだよ。

そうだね、いい子にしていたら、昼間は羊を繋いでおく綱もあげるよ。それに、綱を結んでおく杭もね。

羊を繋いでおくの？ おかしいよ、そんなの。



でも、繋<sup>つな</sup>いでおかなかったら、勝手<sup>かって</sup>にあっちこっち歩<sup>ある</sup>き回<sup>まわ</sup>って、どこかいなくなっ  
ちゃうだろ。

すると、僕<sup>ぼく</sup>の友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>はまた笑<sup>わら</sup>い出<sup>だ</sup>した。

羊<sup>ひつじ</sup>がどこへ行<sup>い</sup>くっていうのさ。

どこにでも。ずっとまっすぐ歩<sup>ある</sup>いていて。。。。

大<sup>だい</sup>丈<sup>じょう</sup>夫<sup>ぶ</sup>だよ。僕<sup>ぼく</sup>の所<sup>ところ</sup>は本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に小<sup>ちい</sup>さいからね。まっすぐに行<sup>い</sup>っても、そんなに遠<sup>とお</sup>  
くには行<sup>い</sup>けないよ。

## Chapter4 第四章

こうして僕は二つ目のとても大切な事を知った。王子さまのいた星は、家一軒よりやや大きいくらいの大きさなのだ。それほど驚きはしなかった。地球や木星、火星、金星の様に、名前のある巨大な星以外にも、望遠鏡でも見つからないほど小さな星が、何百とあることを知っていたからだ。天文学者がそんな星を発見すると、名前の代わりに番号をつける。

例えば、小惑星325といった様に。王子さまがやってきた星は、小惑星B612だと思う。1909年に、トルコの天文学者が一度だけ望遠鏡で観測した星だ。天文学者は国際天文学会で、自分の発見について堂々と発表した。しかしその時は服装のせいで、誰にも信じてもらえなかった。大人なんてそんなもんだ。しかし、小惑星B612に名誉挽回の幸運が訪れた。トルコの独裁者が国民にヨーロッパ風の服を着るように命令し、従わなければ死刑という事になったのだ。そこで天文学者は、1920年、今度はもっと専念された服装で同じ発表を繰り返した。この時は皆が彼の言う事を信じた。

この星の事をこんなに詳しく話して、番号まで教えるのは、大人たちのせいだ。大人は数字が好きだ。数字以外には興味がない。新しい友達の事を話しても、どんな声か、どんな遊びが好きか、ちょうちょう集めているか、といった大切な事は何も聞いてこない。何歳か、何人兄弟か、お父さんの年収はいくらか、といった数字の事ばかり聞いてきて、それですっかり知ったつもりになる。

王子さまは本当にいたよ。可愛かったし、笑っていたし、羊を欲しがっていた。だって、羊を欲しがらって事は、間違えなくその人が本当にいるって事の証拠だからね。

こんなふうに話しても、大人は肩を竦め、子供扱いするだけだ。しかし、王子さまが来た星は小惑星B612だよ、たとえば、大人は納得して、それ以上余計な事は聞いてこない。

大人なんてそんなもんだ。でも、悪く思っているはいけないよ。子供は大人に対して、広い心で接してあげなきゃね。でも、生きるという事がどういう事なのか、よくわ

かっている僕<sup>ぼく</sup>たちには、数字<sup>すうじ</sup>なんかどうでもいい。

本当<sup>ほんとう</sup>だったら僕は、この物語<sup>ものがたり</sup>をお伽話<sup>とぎばなし</sup>のように始めた<sup>はじ</sup>かった。昔々<sup>むかしむかし</sup>、自分<sup>じぶん</sup>よりほんの少し<sup>すこ</sup>大きいだけの星<sup>おほ</sup>に暮らしている小さな王子<sup>ちい おうじ</sup>さまがいました。王子<sup>おうじ</sup>さまは友達<sup>ともだち</sup>をほしがっていました。生きる<sup>い</sup>という事<sup>こと</sup>がどうい<sup>こと</sup>う事<sup>こと</sup>なのかわかって<sup>ひと</sup>いる人<sup>ひと</sup>には、こういう言<sup>い</sup>い方<sup>かた</sup>のほう<sup>ほう</sup>がずっと本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>らしく聞<sup>き</sup>こえるだろう。僕<sup>ぼく</sup>はこの本<sup>ほん</sup>を軽<sup>かる</sup>々<sup>がる</sup>しく読<sup>よ</sup>まれたくない。こうい<sup>おも</sup>った思<sup>で</sup>い出<sup>ばなし</sup>話<sup>かた</sup>を語<sup>こと</sup>る事<sup>こと</sup>は、僕<sup>ぼく</sup>にと<sup>ほん</sup>っ<sup>とう</sup>て本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に辛<sup>から</sup>い。僕<sup>ぼく</sup>の友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>が羊<sup>ひつじ</sup>をつ連れてい<sup>つ</sup>ってしま<sup>ねん</sup>って、もう6年<sup>ねん</sup>になる。こうして彼<sup>かれ</sup>の事<sup>こと</sup>を書<sup>か</sup>くのは、彼<sup>かれ</sup>を忘<sup>わす</sup>れな<sup>い</sup>いた<sup>め</sup>だ。友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>を忘<sup>わす</sup>れてしま<sup>かな</sup>うのは悲<sup>かな</sup>しい、誰<sup>だれ</sup>にでも友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>が<sup>い</sup>るわけ<sup>ではない</sup>。それ<sup>に</sup>、僕<sup>ぼく</sup>も数字<sup>すうじ</sup>にしか興<sup>き</sup>味<sup>ょうみ</sup>の<sup>ない</sup>大<sup>お</sup>人<sup>とな</sup>にな<sup>って</sup>しま<sup>う</sup>か<sup>も</sup>し<sup>れ</sup>な<sup>い</sup>。そう<sup>なら</sup>ない<sup>た</sup>め<sup>に</sup>僕<sup>ぼく</sup>は、絵<sup>え</sup>の具<sup>ぐ</sup>箱<sup>はこ</sup>と鉛<sup>えん</sup>筆<sup>ぴつ</sup>を<sup>か</sup>買<sup>い</sup>った。6歳<sup>さい</sup>でボア<sup>そとがわ</sup>の外<sup>う</sup>側<sup>ちがわ</sup>と内<sup>えが</sup>側<sup>いら</sup>を<sup>な</sup>描<sup>い</sup>いて以<sup>え</sup>来<sup>らい</sup>、何<sup>なん</sup>も描<sup>えが</sup>いてい<sup>な</sup>か<sup>った</sup>僕<sup>ぼく</sup>にと<sup>と</sup>っ<sup>て</sup>、この年<sup>とし</sup>でもう一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>絵<sup>え</sup>を<sup>か</sup>描<sup>く</sup>のは大<sup>たい</sup>変<sup>へん</sup>な事<sup>こと</sup>だ<sup>った</sup>。でき<sup>る</sup>だ<sup>け</sup>、本<sup>ほん</sup>物<sup>もの</sup>そ<sup>っ</sup>く<sup>り</sup>な肖<sup>しょう</sup>像<sup>ぞう</sup>画<sup>が</sup>を<sup>えが</sup>描<sup>い</sup>てみ<sup>る</sup>つ<sup>も</sup>り<sup>だ</sup>。

でも、ち<sup>えが</sup>ゃん<sup>と</sup>と描<sup>えが</sup>けるか<sup>どう</sup>か<sup>は</sup>、自<sup>じ</sup>信<sup>しん</sup>が<sup>ない</sup>。一<sup>いち</sup>枚<sup>まい</sup>い<sup>い</sup>も<sup>の</sup>が描<sup>えが</sup>けても、そ<sup>の</sup>次<sup>つぎ</sup>は<sup>ま</sup>る<sup>で</sup>似<sup>に</sup>てい<sup>ない</sup>か<sup>も</sup>し<sup>れ</sup>な<sup>い</sup>。背<sup>せ</sup>丈<sup>たけ</sup>が<sup>む</sup>ず<sup>か</sup>しいし、服<sup>ふく</sup>の<sup>いろ</sup>色<sup>まよ</sup>も迷<sup>て</sup>さ<sup>ぐ</sup>る。手<sup>て</sup>探<sup>さぐ</sup>り<sup>で</sup>や<sup>っ</sup>て<sup>み</sup>る<sup>が</sup>、も<sup>っ</sup>と大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>な細<sup>こ</sup>か<sup>い</sup>部<sup>ぶ</sup>分<sup>ぶん</sup>を<sup>まち</sup>が<sup>て</sup>て<sup>しま</sup>う<sup>か</sup>も<sup>し</sup>れ<sup>な</sup>い。でも、そ<sup>こ</sup>は<sup>お</sup>お<sup>め</sup>み<sup>に</sup>見<sup>み</sup>て<sup>ほ</sup>しい。王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>さ<sup>ま</sup>は<sup>く</sup>わ<sup>こと</sup>に<sup>な</sup>に<sup>せ</sup>つ<sup>めい</sup>何<sup>なん</sup>も説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>し<sup>て</sup>く<sup>れ</sup>な<sup>か</sup>っ<sup>た</sup>の<sup>だ</sup>。お<sup>そ</sup>ら<sup>く</sup>彼<sup>かれ</sup>は<sup>ぼく</sup>の<sup>こと</sup>事<sup>じ</sup>を<sup>じ</sup>ぶ<sup>ん</sup>と<sup>お</sup>な<sup>なか</sup>ま<sup>お</sup>も<sup>ざん</sup>ね<sup>ん</sup>ん<sup>が</sup>ら<sup>ぼく</sup>は<sup>は</sup>こ<sup>の</sup>箱<sup>はこ</sup>中<sup>なか</sup>の<sup>ひつ</sup>じ<sup>み</sup>を<sup>こと</sup>見<sup>み</sup>る<sup>事</sup>が<sup>す</sup>こ<sup>お</sup>と<sup>な</sup>な<sup>に</sup>な<sup>っ</sup>て<sup>しま</sup>っ<sup>た</sup>の<sup>か</sup>も<sup>し</sup>れ<sup>な</sup>い。年<sup>とし</sup>を<sup>と</sup>取<sup>と</sup>った<sup>の</sup>だ。

## Chapter5 第五章

ひ お ぼうご ぼく おうじ ほし こと たびだ たび  
日を追うごとに僕は王子さまの星の事や、そこからの旅立ち、これまでの旅につ  
し  
て知るようになっていった。おうじ たまたまうち ことば すこ ようす  
王子さまが偶々口にした言葉で、少しずつ様子がわかって  
きた。こうして三日目に、バオバブをめぐり大騒動を知った。これも ひつじ  
た。おうじ きゅう しんぱい  
王子さまが急に心配になったらしくて、こう聞いてきたのだ。

ひつじ ちい き た ほんとう  
羊が小さな木も食べるって、本当なんでしょう？

ほんとう  
うん、本当だよ。

ああ、よかった。

ひつじ ちい き た こと だいじ こと ぼく  
羊が小さな木を食べる事がなぜそんなに大事な事なのか、僕にはわからなかった。  
しかし、おうじ さら き  
王子さまは更にこう聞いてきた。

た  
だったら、バオバブも食べるよね。

ぼく おうじ ちい き きょうかい たてもの おな おお  
僕は王子さまにバオバブは小さな木じゃなくて、教会の建物と同じくらい大き  
き  
な木だから、ゾウの群れを丸ごと連れてきても、たった一本のバオバブも食べきれない  
だろうと教えてあげた。ゾウの群れを おも えが おうじ わら  
思い描いて、王子さまは笑った。

うえ うえ つ かさ  
上に上に積み重ねなきゃいけないね。

つづ するど してき  
しかし、続けてなかなか鋭い指摘をした。

おお まえ ちい  
バオバブだって、大きくなる前は、小さいんだよね。

ひつじ ちい た  
そりゃそうだよ。それにしても、どうして羊に小さなバオバブを食べてもらいた  
いんだい？

なに い あ まえ  
何を言ってるの？ そんなの当たり前でしょう。

ぼく ひとり なんもん と あ こと さんざんあたま ひね  
僕は一人でこの難問を解き明かす事になり、散々頭を捻った。つまり、こうい  
こと おうじ ほし ほか ほし おな くさ わる くさ  
う事だ。王子さまの星には、他の星と同じように、よい草と悪い草があった。よい草  
はよい種から育ち、悪い草は悪い種から育つ。しかし、種は目に見えない。土の中で  
たね そだ わる くさ わる たね そだ たね め み つち なか  
ひっそりと眠っている。その一つが気まぐれに目を覚ますと、伸びをして、おずおずと  
ちい くき たいよう む の はじ あかかぶ  
あどけない小さな茎を太陽に向かって伸ばし始める。それが赤蕪やバラだったら、  
そのままにしておいて構わない。でも、わる くさ わ ぬ と  
悪い草だと分かったら、すぐに抜き取らなくて

はいけない。王子さまの星には、そんな恐ろしい種があった。バオバブの種だ。星の土はどこもかしこもバオバブの種だらけだった。少しでも抜くのが遅れると、バオバブはもう手がつけられなくなる。星全体を覆いつくし、根っ子がつき抜け、穴を開けてしまう。小さな星だと殖過ぎたバオバブで破裂してしまう。

決まりにできるかどうかだね。毎朝、自分の身支度が済んだら、星の手入れに取り掛かる。

芽を出したばかりのバラとバオバブはよく似ているんだけど、それを見分けて、バオバブだと分かったら、すぐに抜いてしまう。手間はかかるけど、とっても簡単な事だよ。偶には仕事を後回しにしても大丈夫な時ってあるけど、バオバブでそんな事をしたら、取り返しがつかなくなるんだ。例えばね、ある星に怠け者が住んでいたんだけど、その人は三本さんぽんバオバブをほったらかしにしていたばかりに……僕は王子さまの話す通りにその星の絵を描いた。星より巨大な三本のバオバブと途方に暮れる怠け者、お説教臭い事を言うのはあまり好きじゃないけれど、バオバブの脅威は地球ではほとんど知られていないし、小惑星で道に迷った人が危険な目に遭う可能性は、あまりにも大きい。だから僕は一度だけ普段の慎みを忘れて、こう言っておこう。

おい、子供たち、バオバブに気をつけろ。

僕は友人たちに警告を与えるために、一生懸命この絵を仕上げた。苦労して描いた価値はあった。他はこれほどうまくいかなかった。バオバブを描いた時は、切羽詰って気持ちが高ぶっていたのだ。

## Chapter6 第六章

ああ、<sup>ちい</sup>小さな<sup>おうじ</sup>王子さま。こうして僕は<sup>ぼく</sup>少しづつ、<sup>すこ</sup>ささやかで<sup>ゆううつ</sup>憂鬱な<sup>きみ</sup>君の<sup>じんせい</sup>人生を<sup>りかい</sup>理解していった。<sup>なが</sup>長い<sup>あいだ</sup>間、<sup>きみ</sup>君には<sup>うつく</sup>美しい<sup>ゆうひ</sup>夕日しか<sup>こころ</sup>心を<sup>なぐさ</sup>慰める<sup>もの</sup>物がなかった<sup>こと</sup>事も。僕は<sup>ひみつ</sup>この<sup>し</sup>秘密を知ったのは、<sup>よっかめ</sup>四日目の<sup>あさ</sup>朝。君がこう言った<sup>きみ</sup>時だ。

僕は<sup>ぼく</sup>、<sup>ゆうひ</sup>夕日が<sup>だいす</sup>大好きなんだ。<sup>ゆうひ</sup>夕日を見に行こうよ。

でも、<sup>ま</sup>待たなきゃね。

待つって、<sup>なに</sup>何を？

<sup>ひ</sup>日が<sup>しず</sup>沈むのをさ。

<sup>きみ</sup>君はとてもびっくりしたようだった。そして、すぐに<sup>わら</sup>笑い<sup>だ</sup>出した。

僕は<sup>ぼく</sup>、まだ<sup>じぶん</sup>自分の<sup>ほし</sup>星にいるつもりになっていたよ。

そうだね。

<sup>だれ</sup>誰もが<sup>し</sup>知っているように、<sup>しょうご</sup>アメリカが<sup>とき</sup>正午の時には<sup>ゆうぐ</sup>フランスは夕暮れだ。だから、<sup>いっぶん</sup>一分で<sup>と</sup>フランスに<sup>おこな</sup>飛んで<sup>ゆうひ</sup>行けたら、<sup>み</sup>夕日を見る<sup>こと</sup>事ができるけど、<sup>ざんねん</sup>残念ながら、<sup>と</sup>フランスは<sup>とお</sup>遠すぎる。だけど君の<sup>きみ</sup>小さな<sup>ちい</sup>星では、<sup>ほし</sup>ほんの<sup>すこ</sup>少し<sup>い</sup>椅子を<sup>す</sup>動かす<sup>うご</sup>だけでいい、<sup>み</sup>そうすれば<sup>とき</sup>見たい時に<sup>なんじ</sup>何時でも、<sup>たそがれ</sup>黄昏を<sup>なが</sup>眺めていられる。

僕は<sup>ぼく</sup>ね、<sup>いち</sup>一日に<sup>かい</sup>44回も<sup>ゆうひ</sup>夕日を見<sup>み</sup>た<sup>こと</sup>事があるよ。

そう言って、<sup>い</sup>暫くして<sup>しばら</sup>から<sup>つけくわ</sup>こう付加えた。

ね、<sup>かな</sup>悲しくて<sup>とき</sup>たまらない<sup>ゆうひ</sup>時って、<sup>こい</sup>夕日が恋しくなるよね。

<sup>かい</sup>44回も<sup>ゆうひ</sup>夕日を見<sup>み</sup>た<sup>ひ</sup>日は、<sup>かな</sup>悲しくてたまらなかったのかい？

しかし、<sup>おうじ</sup>王子さまは<sup>こた</sup>答えなかった。

## Chapter7 第七章

いつかめ 五日目、またも 羊 のおかげで、王子さまの人生のもう一つの秘密が明かされた。いきなり何の前触れもなく、王子さまは僕に聞いてきた。ずっと黙って 考 えていた問題が、ようやく 答えを見出したように。

羊 って、小さな木を食べるなら、花も食べるんじゃないかな。

羊 は見つけた物は何でも食べるよ。

刺のある花でも？

そう、刺のある花でもね。

だったら、刺って何のためにあるの？

そんな事は知らない。

その時僕はエンジンにかたく食い込んだボルトを外すのに必死になっていた。故障は極めて深刻だった。飲み水も底をつきかけていたし、最悪の事態に怯えていた。

ね、刺は何のためにあるの？

王子さまは一度質問をしたら、その答えを聞くまで絶対にあきらめない。僕はボルトにいらいらしていたので、考 えもせず適当に答えた。

刺は何の役にも立たないよ。ただの花の意地悪さ。

えっ？

しかし、一 瞬の沈黙の後、王子さまは憤然として言い返してきた。

そんなこと、信じない。花は弱くて無防備なんだ。でも、できるだけのことをして、安心していいんだ。刺があれば、怖い存在になれると思っているんだ。

僕は返事もしなかった。こんな事を 考 えていたのだ。

このボルトが動かないなら、金槌で叩き壊すしかないな。

しかし、王子さまが 再 び割り込んできた。

でも、君、君は思ってるの？ 花が。。

違う、違う、何とも思っていないよ。思い付いた事を適当に言っただけさ。僕は今 重要な事で頭 がいっぱいなんだよ。

じゅうよう こと  
重 要 な 事 ？

おうじ ぼく み かなづち も ゆびさき きかいあぶら ま くろ おうじ  
王子さまは僕を見ていた。金槌を持って、指先は機械油で真っ黒。王子さまにとっ  
ては、ひどく不格好に見えるものの上に屈み込んでいる。

きみ はな かた おとな なに ま  
君の話し方は大人みたいだ。何もかもごちゃ混ぜにしている。

い ぼく は おうじ ほんとう おこ きんいろ  
そう言われて、僕はちょっと恥ずかしくなった。王子さまは本当に怒っていた。金色  
の髪が風に揺れていた。

ぼく あか が お く ほし い こと  
僕は赤ら顔のおじさんが暮らす星に行った事がある。そのおじさんは一度も花の  
かお こと ほし なが こと だれ あい こと  
香りをかいた事がない。星を眺めた事もない。誰かを愛した事もない。おじさんは  
たしざんいがい なに こと いちにちじゅう きみ く かえ い  
足算以外、何もした事がないんだ。そして一日中、君みたいに繰り返して言ったよ。  
わたし じゅうようじんぶつ わたし じゅうようじんぶつ おおいば い ば ふく あ  
私は重要人物だ、私は重要人物だってね。そして大威張りに威張って、膨れ上  
がっている。でも、そんなのは人間じゃない、キノコだ。キノコだよ。

おうじ かお いか あお  
王子さまの顔は怒りのあまり青ざめていた。

なん ねん まえ はな とげ つ なん ねん まえ ひつじ はな  
何百万年も前から、花は刺を付けている。何百万年も前から、羊はそれでも花  
た  
を食べる。

はな やくた とげ つ かんが だいじ こと  
どうして花がわざわざ役立たずの刺を付けるのか、考えるのは大事な事じゃないっ  
ていうの？ 羊と花との戦いは重要じゃないっていうの？ あか が お ふと  
赤ら顔の太ったおじさ  
んのだしざん だいじ じゅうよう ぼく せかいじゅう ひと  
んの足算よりも、大事でも、重要でもないっていうの？ 僕は世界中でたった一つだ  
けのはな し ぼく ほし さ ひつじ あさなに かんが  
けの花を知っていて、それは僕の星にしか咲いていないのに、羊がある朝何も考  
え  
ずにパクっとその花を食べてしまっても、そんな事は重要じゃないっていうの？ も  
し だれ なに ほし なか ひと ほし さ はな あい ひと  
しも誰かが何百万もの星の中でたった一つの星に咲く花を愛していたら、その人は  
ほしそら み あ しあわ ぼく はな さ おも  
星空を見上げるだけで、幸せになれる。僕の花はあのどこかで咲いている、と思っ  
て  
ね。でも 羊が花を食べてしまったら、それはその人にとって、星の光が全ていきな  
り消えてしまうって事なんだよ。それが重要じゃないっていうの？

おうじ いじょうな い ふ い な だ よる  
王子さまはそれ以上何も言えなくなった。そして不意に泣き出した。夜になってい  
た。ぼく こうぐ な す かなづち のど かわ せま く し  
僕は工具を投げ捨てた。金槌もボルトも、喉の渇きも、迫り来る死も、もはやど  
うでもよかった。ぼく ほし ちきゅう なぐさ もと ちい おうじ  
僕の星、この地球に慰めを求めている小さな王子さまがいたのだ。  
ぼく おうじ りょううで いだ ちい からだ しず ゆ  
僕は王子さまを両腕で抱きしめ、小さな体を静かに揺すってあげた。



君<sup>きみ</sup>が愛<sup>あい</sup>する花<sup>はな</sup>は危<sup>あぶ</sup>ない目<sup>め</sup>になんか遭<sup>あ</sup>わないよ。僕<sup>ぼく</sup>が羊<sup>ひつじ</sup>の口<sup>くち</sup>に嵌<sup>は</sup>める口輪<sup>くちわ</sup>をかいてあげる。

花<sup>はな</sup>の周<sup>まわ</sup>りには囲<sup>かこ</sup>いをかいてあげるよ。僕<sup>ぼく</sup>は……

その先<sup>さき</sup>は何<sup>なに</sup>を言<sup>い</sup>えばいいのか、分<sup>わ</sup>からなかった。なんて不器用<sup>ぶきよう</sup>なんだろう。どうすれば王<sup>おう</sup>子<sup>こ</sup>さまの心<sup>こころ</sup>に届<sup>とど</sup>くのか。どうすれば再<sup>ふた</sup>び一<sup>ひと</sup>つになれるのか。僕<sup>ぼく</sup>には分<sup>わ</sup>からなかった。本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に謎<sup>なぞ</sup>めい<sup>なみだ</sup>ている涙<sup>く</sup>の国<sup>くに</sup>という所<sup>ところ</sup>は……

## Chapter8 第八章

すぐに僕は王子さまの花の事を、もっとよく知るようになった。王子さまの星にはもともと花びらが一重の素朴な花が場所もとらず、邪魔にもならず咲いていた。ところがある日、どこからともなく運ばれてきた種が芽を出した。王子さまは他のものとは似ても似つかないその芽を見つけて、注意深く観察していた。新種のバオブブかもしれないからだ。

しかしそれはすぐに伸びるのをやめ、花を咲かせる準備を始めた。ふっくらと大きく艶やかに蕾が育っていくのを見て、王子さまは奇跡のようなものが現れてくるのを感じていた。

しかし花は緑の部屋に隠れたまま、美しい装いにかかりきりだった。慎重に色を選び、ゆっくり衣装を纏い、花びらを一枚ずつ整える。雛罌粟のように皺くちな姿は見せたくなかった。これ以上はない輝きを放つ美しい姿で華麗に登場したかった。そう、花はとてもお洒落だった。

謎めいた準備は何日も続いた。そしてある朝、ぴったり日の出の時間に、花は姿を現した。

そして、あれほど念入りに装いを凝らしておきながら、欠伸を噛み殺してこう言った。

ああ、たった今日が覚めたばかり、ごめんなさいね。髪がぼそぼそだわ。

しかし王子さまは感動を抑える事ができなかった。

なんて綺麗なんだ、君は。

でしょう？

花は静かに答えた。

私はお日様と一緒に生まれたんですもの。

王子さまは花があまり謙虚ではない事に気付いたが、それでも目が眩むほど美しかった。

そろそろ朝食のお時間ね、お願いしてもよろしいかしら？

王子さまはすっかりドギマギしていたが、如雨露に新鮮な水を汲んできて、たっぷ

はな  
り花にかけてあげた。花はすぐに気まぐれな自惚れで王子さまを困らせるようになった。例えばある日、自分の四本の刺の話をしてながらこう言った。

とら き だいじょうぶ すんど つめ  
たとえ虎が来ても大丈夫よ。鋭い爪で。。

ぼく ほし とら  
僕の星には虎はいないよ。それに、虎は草を食べないし。

わたし くさ  
私、草ではないんですけど。

ごめんなさい。

とら  
虎なんかちっとも怖くないけれど、風が吹き込むのは苦手なの。あなた、衝立はな  
いのかしら。

かぜ ふ こ にがて しょくぶつ こま こと はな けっこうきむずか  
風が吹き込むのが苦手だなんて、植物なのに、困った事だな。この花は結構気難  
し屋さんだぞ。

くら  
暗くなったら、ガラスの覆いを被せてちょうだい？ この星はとても寒いわ。作り  
が悪いのね。前に私がいた所は。。

はな ぐち つぐ たね じょうたい き ほか せかい こと なにひと  
花はいきなり口を噤んだ。種の状態で来たのだから、他の世界の事など何一つ  
知っているはずがない。花はすぐにばれる嘘をついてしまった事が恥ずかしくて、悪い  
のは王子さまのせいにしようと、二度三度せきをしたで、衝立は？

さが い きみ はな  
探しに行こうとしていたら、君が話しかけてきたんでしょ。

はな おうじ りょうしん うず  
すると花はわざとまたせきをして王子さまの良心を疼かせた。

こうして王子さまは心から愛していたにも関わらず、じきに花の事を信用でき  
なくなっていく。些細な言葉を一一深刻に受け止め、そのたびに不幸になった。

はな い こと き  
花の言う事なんか、聞かないほうがよかったんだよ。ただ眺めたり、香りを楽しん  
でいればいいんだ。あの花は僕の星をいい香りで満たしてくれた。それなのに僕はそ  
れを楽しめなかった。虎の爪の話にしても、僕はうんざりしたけれど、花にして見れ  
ば、ほろりとさせるつもりだったのかもしれない。あの頃の僕は何もわかっていなかった  
んだね。言葉ではなく、振る舞いで判断しなくちゃいけなかったんだ。花は僕の星を  
いい香りで満たし、明るくしてくれた。僕は逃げちゃいけなかったんだ。つまらない見  
せかけに隠れた花の優しさに気付くべきだった。花って本当に矛盾しているからね、  
でも僕はまだ子供で、あの花の愛し方がわからなかったんだ。

## Chapter9 第九章

王子さまは星から出て行くために、渡り鳥の移動を利用したようだ。旅立ちの朝、王子さまは星をきちんと片付けた。活火山を掃除して、煤を丁寧に取り払った。二つの活火山は朝食を温めるのになかなか便利だった。用心にこした事はないので、一つある死火山の煤も払っておいた。綺麗に掃除しておけば、火山は静かに安定して燃えて、噴火はしない。

それから王子さまはちょっぴり寂しそうに、生えてきたばかりのバオバブの芽を抜いた。

二度と帰ってくるつもりはなかった。その朝はやり慣れた作業が、何もかもとても愛しく感じられた。花に最後の水をやり、ガラスの覆いを被せてあげようとした時、王子さまは自分が泣き出しそうになっている事に気付いた。

さようなら。

王子さまは花に言った。しかし、花は答えなかった。

さようなら。

王子さまは繰り返した。花はせきをした。でも、風のせいではなかった。

私がバカでした。許してください。幸せになってね。

非難の言葉がなかったので、王子さまはびっくりした。すっかり戸惑って、ガラスの覆いを持ったまま立ち尽くした。この穏やかな優しさの意味が分からなかった。

そうよ、私、あなたを愛している。あなたが気付かなかったのは私のせいね。もうどうでもいいけど。でもあなたも私と同じくらいバカだったのよ。幸せになってね。ガラスの覆いは捨てて、もういないから。

でも、風が。。。。

風ならそんなにひどくないわ。夜の涼しい空気は体にいいし、私は花ですもの。

でも、動物が来たら。。。。

蝶蝶と知り合いになれたかったら、毛虫の二匹や三匹、我慢しなきゃね。蝶蝶って、とても綺麗だって聞いたわ。だって、他に誰が私を訪ねてくれるっていうの？ あ

あなたは遠くへ行ってしまおうし、大きな動物も全然怖くないわ。私にだって爪があるもの。

そう言って花は無邪気に四本の刺を見せ、こう言った。

そうやっていつまでもぐずぐずしないで、いらいらするから。行くって決めたのなら、すぐに行って。

花は泣いているところを、王子さまに見られたくなかったのだ。それほど自尊心の  
高い花だった。

## Chapter10 第十章

王子さまは小惑星325、326、327、328、329、330の近くを通りかかった。そこで仕事を探したり、見聞を広げるため、それらの小惑星を一つずつ訪ねる事にした。最初の星には王様が住んでいた。緋色の衣に白点の毛皮を纏い、質素だが、威厳のある玉座に腰掛けていた。

王子様を見かけると、大きな声で言いました。

「や、家来が来たなあ！」

王子様は、一度も僕に会ったことがないのに、どうして見覚えがあるのだろうと考えました。王様にかかれば、世界はとてもあっさりしたものになる。誰も彼もみんな、家来。王子様はそれを知らなかったんだ。

「近く寄りなさい。そのほうがもっとよく見えるように。」

王様はやっと誰かに王様らしくできると、嬉しくてたまらなかった。

王子様はどこかに座ろうと、周りを見た。でも、星は大きな毛皮の裾で、どこもいっぱいだった。王子様は仕方なく立ちっぱなし、しかもへとへとだったから、あくびが出た。

「王の前であくびとは、作法がなっとらん！」と、王様は言った。「ダメであるぞ！」

「我慢できないんです。」と、王子様は迷惑そうに返事をした。「僕、長い旅をしてきたんでしょう？ それに、眠らなかったものですから…」

「そうか。では、あくびをしなさい。命令する。わしはもう何年か人のあくびをするのを見たことがない。あくびというものは面白いものだなあ。さあ、あくびしなさい、もう一度、命令じゃ。」

「胸がドキドキして、もうできなくなりました。」と、王子様は、顔を真っ赤にした。

「これはこれは…では、こう命令する。あるときはあくびをし、あるときは…」

王様は何か口の中でもぐもぐ言って、気を揉んでいる様子でした。

なぜなら、王様はなんでも自分の思い通りにしたくて、そこから外れるものは許せなかった。いわゆる、絶対の王様ってやつ。でも、根は優しかったので、物分りの

いいことしか言いつけなかった。

王様にはこんな口癖がある。

「わしが大将に海の鳥になれと命令したとする。その大将がわしの命令に従わないとしても、大将がいけないわけではないだろう。わしがいけないのだろう。」

「座っていい？」と、王子様は気まずそうに言った。

「うん、座んなさい、命令する。」王様は毛皮の裾を厳かに引いて、言いつけた。

でも、王子様にはよくわからないことがあった。この星はすごくちいちゃい、王様は一体、何を治めてるんだろうか。

「陛下、すいませんが、質問が…」

「訪ねなさい、命令する！」と、王様は慌てて言った。

「陛下は何を治めてるんですか。」

「すべてである。」と、王様は当たり前のように答えた。

「すべて？」

王様はそっと指を出して、自分の星と、ほかの惑星とか星とか、みんなを指した。

「あれをみんな？」と、王子様は言った。

「うん、あれをみんな。」と、王様は答えた。なぜなら、絶対の王様であるだけでなく、宇宙の王様でもあったからだ。

「じゃあ、星はみんな、陛下にしたがっているわけですね？」

「そうだと。すぐにも従う。わしは不規律を許さんのじゃ。」

あまりにすごい力なので、王子様はびっくりした。自分にもしそれだけの力があれば、40回と言わず、72回、いや、100回でも、いやいや、200回でも、夕暮れがたった一日の間に見られるんじゃないか。しかも、椅子も動かずに。

そう考えたとき、ちょっと切なくなった。そういえば、自分の小さな星を捨ててきたんだって。だから、思い切って、王様をお願いをしてみた。

「夕暮れが見たいんです。どうかお願いします。夕暮れろって言ってください。」

「わしが大将に向かって、蝶々みたいに花から花へ飛べとか、悲劇を書けとか、海の鳥になれとか、命令するとする。そして、その大将が命令を実行しないとした

ら、大<sup>たいしょう</sup>将<sup>しょう</sup>とわしと、どっちが間違<sup>まちが</sup>ってるだろうかね。」

「王<sup>おうさま</sup>様<sup>ほう</sup>の方<sup>ほう</sup>です。」と、王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>はきっぱり言<sup>い</sup>った。

「その通<sup>とお</sup>り。人<sup>ひと</sup>には銘<sup>めい</sup>々<sup>めい</sup>その人<sup>ひと</sup>のできることをしてもらわなきゃならん。道<sup>どう</sup>理<sup>り</sup>の土<sup>ど</sup>台<sup>だい</sup>あつての権<sup>けん</sup>力<sup>りよく</sup>じゃ。もし、お前<sup>まえ</sup>が人民<sup>じんみん</sup>たちに、海<sup>うみ</sup>に行<sup>い</sup>って飛<sup>と</sup>び込<sup>こ</sup>めと命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>したら、人民<sup>じんみん</sup>たちは革<sup>かく</sup>命<sup>めい</sup>を起<sup>お</sup>こすだろう。わしは無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>の命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>をしないのだから、みんなをわしに服<sup>ふく</sup>従<sup>じゆう</sup>させる権<sup>けん</sup>力<sup>りよく</sup>があるのじゃ。」

「じゃあ、僕<sup>ぼく</sup>の夕<sup>ゆう</sup>暮<sup>ぐ</sup>れは？」と、王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>は迫<sup>せま</sup>った。なぜなら、王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>は一度<sup>いちど</sup>聞<sup>き</sup>いたことは絶<sup>ぜ</sup>対<sup>たい</sup>忘<sup>わす</sup>れない。

「うーん、夕<sup>ゆう</sup>日<sup>ひ</sup>は見<sup>み</sup>せてあげろ。わしが命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>してやる。だが、都<sup>つ</sup>合<sup>ごう</sup>がよくなるまで、待<sup>ま</sup>つとしよう。それがわしの政<sup>せい</sup>治<sup>じ</sup>のことじゃ。」

「それはいつ？」と、王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>は尋<sup>たず</sup>ねる。

「うーん…」と、王<sup>おうさま</sup>様<sup>さま</sup>は言<sup>い</sup>って、分<sup>ぶん</sup>厚<sup>あつ</sup>い暦<sup>れき</sup>を調<sup>しら</sup>べた。「うーん、そうだなあ。大<sup>だい</sup>体<sup>たい</sup>、午<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>7時<sup>じ</sup>40分<sup>ふん</sup>ぐらいである。まあ、見<sup>み</sup>ていなさい、万<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>わしの命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>通<sup>とお</sup>りになるから。」

王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>はあくびをした。夕<sup>ゆう</sup>暮<sup>ぐ</sup>れに会<sup>あ</sup>えなくて、残<sup>ざん</sup>念<sup>ねん</sup>だった。それに、ちょっともううんざりだった。

「ここですることはもうないから。」と、王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>は王<sup>おうさま</sup>様<sup>さま</sup>に言<sup>い</sup>った。「そろそろ行<sup>い</sup>くよ。」

「行<sup>い</sup>くな、行<sup>い</sup>くな！」と、王<sup>おうさま</sup>様<sup>さま</sup>は言<sup>い</sup>った。家<sup>け</sup>来<sup>らい</sup>ができて、それだけ嬉<sup>うれ</sup>しかったんだ。

「行<sup>い</sup>ってはならん！ そちを大<sup>だい</sup>臣<sup>じん</sup>にしてやるぞ！」

「それで何<sup>なに</sup>をするの？」

「うーん、人<sup>ひと</sup>を裁<sup>さば</sup>くであるぞ！」

「でも、裁<sup>さば</sup>くにしても、人<sup>ひと</sup>がいないよ。」

「そりゃ分<sup>わ</sup>からん。わしはまだ、わしの国<sup>くに</sup>を回<sup>まわ</sup>ってみたことがないんでね。年<sup>とし</sup>を取<sup>と</sup>つたし、馬<sup>ば</sup>車<sup>しゃ</sup>を置<sup>お</sup>く場<sup>ばしょ</sup>所<sup>しょ</sup>がないんで、歩<sup>ある</sup>くのが疲<sup>つか</sup>れるよ。」

「うーん〜でも僕<sup>ぼく</sup>はもう見<sup>み</sup>たよ。」と、王<sup>おうさま</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>は屈<sup>かが</sup>んで、もう一度<sup>いちど</sup>チラリっと星<sup>ほし</sup>の向<sup>む</sup>こう側<sup>がわ</sup>を見<sup>み</sup>た。「あっちには人<sup>ひと</sup>っ子<sup>こ</sup>一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひとり</sup>いない。」

「なら、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を裁<sup>さば</sup>くである。」と、王<sup>おうさま</sup>様<sup>さま</sup>は答<sup>こた</sup>えた。「もつと難<sup>むずか</sup>しいぞ、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を裁<sup>さば</sup>くほう<sup>ほう</sup>が、人<sup>ひと</sup>を裁<sup>さば</sup>くよりも、はるかに難<sup>むずか</sup>しい。うまく自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を裁<sup>さば</sup>くことができたなら、そ



れは、正 真 正 銘 賢 者 の 証 だ。」

すると、王子様は言った。

「僕、どこにいたって、自分を裁けます。ここに住む必要はありません。」

「ええとね、わしの星には、年とったねずみがどこかにいるようじゃ。夜、物音がするからな。そのヨボヨボのねずみを裁けばよい。ときとき、死刑にするのである。そうすれば、その命はそちの裁き次第である。だが、いつも許してやることだ。一匹しかいないねずみなんだからね。」

また、王子様は返事をする。

「僕、死刑にするの嫌いだし、もう、さっさと行きたいんです。」

「ならん！」と、王様は言う。

もう、王子様はいつでも行けたんだけど、年寄りの王様をしょんぼりさせたくなかった。

「もし陛下が、言う通りになるのをお望みなら、物分りのいいことを言いつけられるはずです。ほら、一分以内に出發せよ、とか。僕には、都合良くなっているように思えますけど。」

王様は何も言わなかった。

王子様はどうしようかと思ったけど、ため息をついて、ついに星を後にした。

「そちをほかの星へ使わせるぞ！」そのとき、王様は慌ててこう言った。まったくもって、偉そうな言い方だった。

大人の入って、相当変わってるなあ。と、王子様は旅を続けながら、そう思った。

# Chapter11 第十一章

にばんめ ほし うぬぼ おとこ す  
二番目の星には自惚れ男が住んでいた。

「やあやあ、俺に感心している人間がやってきたなあ！」と、自惚れ男は王子様  
を見かけたなり、遠くから叫んだ。

うぬぼ おとこ め み ひと じぶん かんしん  
自惚れ男の目から見ると、ほかの人はみんな、自分に感心しているのだ。

「こんにちは。変な帽子被ってるね。」

「こりゃ挨拶するための帽子だ。俺をやんやとはやしてくれる人がいるときに、挨拶  
するための帽子なんだ。でも、あいにく、誰もこっちのほうへやってこないんでね。」

「あっ、そう？」と、王子様は言ったが、相手が何を言っているのか、わからなかったのだ。

て たた うぬぼ おとこ い  
「手を叩きなさい、パチパチと！」自惚れ男は言った。

おうじさま て うぬぼ おとこ ぼうし も あ  
王子様は、手をパチパチと叩いた。すると、自惚れ男は帽子を持ち上げながら、  
丁寧にお辞儀をした。

「こりゃ、王様を訪ねるより面白いな。」と、王子様は思っ、また手をパチパチ  
と叩いた。自惚れ男は、また帽子を持ち上げながら、お辞儀をした。

ふんかん て たた けいこ おうじさま おな  
五分間も手を叩く稽古をしているうちに、王子様は、することがいつまでも同じ  
ことなので、くたびれた。

「その帽子を落とすには、どうすればいいの？」王子様は聞いてみた。

しかし、褒め言葉しか聞こえない自惚れ男には、質問も全く聞こえない。

「お前さんは、本当に俺に感心しているのかね。」と、自惚れ男が王子様に訪ね  
ました。

かんしん いったい  
「感心するって、それ、一体どういうこと？」

「感心するっていうのはね、俺がこの星のうちで、一番美しく、一番立派な服  
を着ていて、一番お金持ちで、それに、一番賢い人だと思うことだよ。」

「でも、この星の上にいる人ったら、あんたひとりっきりじゃないの？」

「頼むからね、まあ、とにかく、俺に感心してくれ！」

「<sup>ぼく</sup>僕、<sup>かんしん</sup>感心するよ。」と、<sup>おうじさま</sup>王子様はちょっと<sup>かた</sup>肩をすくめながら<sup>い</sup>こう言った。「でも、なぜそんなことに<sup>こたわ</sup>拘るの？」

<sup>おうじさま</sup>王子様はその<sup>ほし</sup>星から<sup>た</sup>立ち<sup>さ</sup>去った。<sup>おとな</sup>大人って、やっぱり<sup>ほんとう</sup>本当に<sup>きみょう</sup>奇妙だな。<sup>おうじさま</sup>王子様は<sup>たび</sup>旅を<sup>つづ</sup>続けながら、<sup>おも</sup>そう思った。

## Chapter12 第十二章

つぎ ほし おおざけ す  
次の星には、大酒のみが住んでいた。ほんの 短い訪問だったが、王子さまはひどく落ち込んでしまった。

なに  
何をしているの？

さけ の  
酒を飲んでいる。

の  
なぜ飲んでいるの？

わす  
忘れるため。

おうじ おとこ かわいそう  
王子さまはこの男が可哀相になってきた。

なに わす  
何を忘れるため？

はじ わす  
恥を忘れるためさ。

おうじ おとこ すく おも  
王子さまはこの男を救ってあげたいと思った。

なに はじ  
何が恥なの？

さけ の こと い お おおざけ ちんもく ど くち あ  
酒を飲む事が…そう言い終わると、大酒のみは沈黙し、二度と口を開かなかった。

おうじ どうわく た さ  
王子さまは当惑して、そこから立ち去った。

おとな ほんとう ほんとう きみょう  
大人ってやっぱり本当に本当に奇妙だな。

## Chapter13 第十三章

よんばんめ ほし じつぎょうか ほし おとこ いそが  
四番目の星は、実業家の星でした。その男は、たいへん忙しがっていたので、  
おうじさま あたま  
王子様がやってきたも、頭をあげようとしなない。

「こんにちは。タバコの灰が消えてますよ。」と、おうじさま おとこ い  
王子様は、その男に言った。

「3足す2は5。5足す7は12。12足す3は15。やあ、こんにちは。15足す  
7は22。22足す6は28。やあ、どうも。タバコに火をつける暇はありません。2  
6足す5は31。ふん、うまいぞ。これで五億百六十二万二千七百三十一になったぞ。」

「五億って、何がさ？」

「え？ まだそこにいたのか。五億…もうわからん、やらなきゃいけないことがたく  
さんあるんだ！ ちゃんとしてるんだ わたし むだぐち たた ひま  
私は。無駄口を叩いてる暇はない！ 2足す5は  
7と…」

「五億百万って、何がさ？」と、いちどなに き だ あと  
一度何か聞き出すと、どんなことがあっても、後に  
ひ おうじさま く かえ  
は引かない王子様は、繰り返した。

じつぎょうか あたま あ  
実業家は頭を上げた。

「54年この星に住んでいるが、気が散ったのは、3度だけだ。最初は、あれだ、2  
2年前のこと。コガネムシがどこからともなく、飛び込んできたせいだ。ブンブンとう  
るさくしたから、た ざん かいまちが ど め  
足し算を4回間違えた。2度目は、あれだ、11年前、リュウマチ  
の発作が起きたせいだ。うんどうぶそく ある ひま  
運動不足で、歩く暇もない。ちゃんとしてるんだ、わたしは。  
ど め いま い  
3度目は…まさに今だ！ さてと、五億百万って言ってたな…」

なに  
「何が五億なの？」

じつぎょうか あきら  
実業家はほっとしてもらえないんだと、諦めた。

「ときとき、空に見える、あのちっちゃなものさ。」

「ハエのこと？」

「いや、そうじゃない。キラキラしてる、ちっちゃなものさ。」

「ミツバチ？」

「いいや。そのちいちゃいのは、こがねいろ なま もの  
黄金色で、怠け者をうっとりさせる。だが、ちゃん

としているからな、わたしは。うっとりしてる暇はない。」

「あっ、星？」

「そうだ、星だ。」

「じゃあ、五億の星をどうするの？」

「五億百六十二万二千七百三十一。ちゃんとしてるんだ、私 は。細かいんだ。」

「それで、星をどうするの？」

「どうするかって？」

「うん。」

「何も。自分のものにする。」

「星が、君のもの？」

「そうだ。」

「でも、さっき会った王様は…」

「王様は、自分のものにしない、治めるんだ。全然違う。」

「じゃあ、星が自分のものだと、何のためになるの？」

「ああ、お金持ちになれるね。」

「じゃあ、お金持ちだと、何のためになるの？」

「また、別の星が買える。新しいのが見つかったら。」

おうじさま　こころ　なか　おも　ひと　へりくつ　おおざけの  
王子様は 心 の中で思った。「この人、ちょっと屁理屈こねてる。さっきの大酒飲  
みと一緒だよ！」

でも、とりあえず、質問を続けた。

「どうやったら、星が自分のものになるの？」

「星は一体、誰のものかね。」と、実業家は、感に触ったらしく、言い返した。

「わかんない。誰のものでもない。」

「じゃあ、私 のものだ。最初に思いついたんだから。」

「それでいいの？」

「もちろん。例えば、君が、誰のものでもないダイヤを見つけたら、それは君のもの  
のになる。誰のものでもない島を見つけたら、それは君のもの。最初に何かを思いつ

いたら、特許<sup>とっきょ</sup>が取れる、君<sup>きみ</sup>のものだ。だから、私<sup>わたし</sup>は星<sup>ほし</sup>を自分<sup>じぶん</sup>のものにする。なぜなら、私<sup>わたし</sup>より先に、誰<sup>だれ</sup>ひとりも、そんなことを思い<sup>おも</sup>つかなかったからだ。」

「うん、なるほど。」と王子様<sup>おうじさま</sup>は言った。「で、それをどうするの？」

「管理<sup>かんり</sup>するのさ。いくつあるのか、勘定<sup>かんじょう</sup>するんだ。何度も勘定<sup>なんど かんじょう</sup>しなすんだ。難しい<sup>むずか</sup>仕事<sup>しごと</sup>だが、しかし、俺<sup>おれ</sup>はちゃんとした男<sup>おとこ</sup>だからな。」

王子様<sup>おうじさま</sup>は、まだ納得<sup>なっとく</sup>できなかった。

「僕は、スカーフ一枚<sup>いちまい</sup>、僕<sup>ぼく</sup>のものだったら、首<sup>くび</sup>の周り<sup>まわ</sup>に巻きつけて、お出<sup>で</sup>かけする。僕は、花<sup>はな</sup>が一輪<sup>りん</sup>、僕<sup>ぼく</sup>のものだったら、花<sup>はな</sup>を摘<sup>つ</sup>んで持<sup>も</sup>っていく。でも、君<sup>きみ</sup>、星<sup>ほし</sup>は摘<sup>つま</sup>めないよね。」

「そうだ。だが、銀行<sup>ぎんこう</sup>にあずけられる。」

「それって、どういうこと？」

「自分<sup>じぶん</sup>の星<sup>ほし</sup>の数<sup>かず</sup>を、小さな紙切れ<sup>ちい</sup>に書き留<sup>かみき</sup>めるってことだ。そうしたら、その紙<sup>かみ</sup>を、引き出<sup>ひ</sup>しにしまっ<sup>だ</sup>て、鍵<sup>かぎ</sup>をかける。」

「それだけ？」

「それでいいんだ！」

王子様<sup>おうじさま</sup>は思<sup>おも</sup>った。面白<sup>おもしろ</sup>いし、それなりにかっこいい。でも、全然<sup>ぜんぜん</sup>ちゃんとしてない！王子様<sup>おうじさま</sup>は、ちゃんとしたことについて、大人<sup>おとな</sup>の人<sup>ひと</sup>と、違<sup>ちが</sup>った考<sup>かんが</sup>えを持<sup>も</sup>っていたんだ。

「僕はね、花<sup>はな</sup>を持<sup>も</sup>ってて、毎日<sup>まいにち</sup>水<sup>みづ</sup>をかけてやる。火山<sup>かざん</sup>も三つ<sup>みつ</sup>持<sup>も</sup>ってるんだから、七日<sup>なのか</sup>に一度<sup>いちど</sup>煤<sup>すす</sup>払い<sup>すはら</sup>をする。火<sup>ひ</sup>を吹<sup>ふ</sup>いていない火山<sup>かざん</sup>の煤<sup>すす</sup>払い<sup>すはら</sup>もする。いつ爆発<sup>ばくはつ</sup>するかわからないからね。僕<sup>ぼく</sup>が、火山<sup>かざん</sup>や花<sup>はな</sup>を持<sup>も</sup>ってると、それが少<sup>すこ</sup>しは、火山<sup>かざん</sup>や花<sup>はな</sup>のためになるんだ。だけど君<sup>きみ</sup>は、星<sup>ほし</sup>のためには、なっ<sup>な</sup>てやしない。」

実業家<sup>じつぎょうか</sup>は口元<sup>くちもと</sup>を開<sup>ひら</sup>いたが、返<sup>かえ</sup>す言葉<sup>ことば</sup>が見<sup>み</sup>つからなかった。王子さま<sup>おうじ</sup>はそこを後<sup>あと</sup>にした。

大人<sup>おとな</sup>ってまったく本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にとんでもないな。

王子さま<sup>おうじ</sup>は旅<sup>たび</sup>をつづ<sup>つづ</sup>けながらそう思<sup>おも</sup>った。

## Chapter14 第十四章

五番目の星はとても珍<sup>めづら</sup>しい星<sup>ほし</sup>だった。星<sup>ほし</sup>のうちで、一番小<sup>いちばんちい</sup>さな星<sup>ほし</sup>だった。そこには、ちょうど、街灯<sup>がいとう</sup>と点灯人<sup>てんとうびと</sup>がいられるぐらいの場所<sup>ばしょ</sup>しかなかった。王子様<sup>おうじさま</sup>はどうやってもわからなかった。空<sup>から</sup>のこんな場所<sup>ばしょ</sup>で、星<sup>ほし</sup>に家<sup>いえ</sup>もないし、人<sup>ひと</sup>もいないのに、街灯<sup>がいとう</sup>と点灯人<sup>てんとうびと</sup>がいて、何<sup>なん</sup>のためになるんだろうか。それでも、王子様<sup>おうじさま</sup>は、心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>でこうおもった。

この人<sup>ひと</sup>はバカバカしいかもしれない。でも、王様<sup>おうさま</sup>、自惚<sup>うぬぼ</sup>れ男<sup>おとこ</sup>、実業家<sup>じつぎょうか</sup>や、大酒飲<sup>おおざけの</sup>みよりは、バカバカしくない。そうだとすると、この人<sup>ひと</sup>のやってることには、意味<sup>いみ</sup>がある。明<sup>あ</sup>かりをつけるってことは、例<sup>たと</sup>えるなら、星<sup>ほし</sup>とか、花<sup>はな</sup>とかが、ひとつ新<sup>あた</sup>しく生<sup>う</sup>まれるってこと。だから、灯<sup>とも</sup>りを消<sup>け</sup>すのは、星<sup>ほし</sup>とか花<sup>はな</sup>をお休<sup>やす</sup>みさせるってこと。とっても素敵<sup>すてき</sup>なお勤<sup>つと</sup>め。素敵<sup>すてき</sup>だから、本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に、誰<sup>だれ</sup>かのためになる。

王子様<sup>おうじさま</sup>は、星<sup>ほし</sup>に足<sup>あし</sup>を踏<sup>ふ</sup>み入<sup>い</sup>れたとき、丁寧<sup>ていねい</sup>に点灯人<sup>てんとうびと</sup>にお辞儀<sup>じぎ</sup>をした。

「こんにちは。なぜ、いま、街頭<sup>がいとう</sup>の火<sup>ひ</sup>を消<sup>け</sup>したの？」

「命令<sup>めいれい</sup>だよ。やあ、おはよう。」と、点灯人<sup>てんとうびと</sup>が答<sup>こた</sup>えた。

「どうな命令<sup>めいれい</sup>？」

「街頭<sup>がいとう</sup>の火<sup>ひ</sup>を消<sup>け</sup>すことだよ。やあ、こんばんは。」と言って、点灯人<sup>てんとうびと</sup>はまた火<sup>ひ</sup>をつけた。

「だけど、なぜ、また火<sup>ひ</sup>をつけたの？」

「命令<sup>めいれい</sup>だよ。」と、点灯人<sup>てんとうびと</sup>が答<sup>こた</sup>えた。

「わからないなあ。」と、王子様<sup>おうじさま</sup>が言<sup>い</sup>った。

「わからなくていいよ、命令<sup>めいれい</sup>は命令<sup>めいれい</sup>だよ。やあ、おはよう。」と言って、点灯人<sup>てんとうびと</sup>は街頭<sup>がいとう</sup>の火<sup>ひ</sup>を消<sup>け</sup>した。

それから、おでこを赤<sup>あか</sup>いチェッ<sup>ふ</sup>クのハンカチで拭<sup>ふ</sup>いた。

「なにしろ、とんでもない仕事<sup>しごと</sup>だよ。昔<sup>むかし</sup>は理屈<sup>りくつ</sup>にあったんだがね。朝<sup>あさ</sup>になると火<sup>ひ</sup>を消<sup>け</sup>す、夕方<sup>ゆうがた</sup>になると、火<sup>ひ</sup>をつける。昼間<sup>ひるま</sup>は休<sup>やす</sup>めたし、夜<sup>よる</sup>は眠<sup>ねむ</sup>ったもんだ。」

「で、そのあと、命令<sup>めいれい</sup>が変<sup>か</sup>わったってこと？」



「命令は変わりゃしないよ。それが本当、ひどい話なんだ。この星は年々、回るのがどんどん早くなるのに、命令は変わらないときてるんだからなあ。」

「つまり？」

「つまり、今じゃ、この星のやつが、一分間に一周りすることになってるんで、俺ときたら、一秒も休めなくなっただよ。一分間に一度、火をつけたり、消したりするんだからなあ。」

「変だなあ。一分間が一日だなんて。」

「ちっとも変なことなんかないよ。俺たちは、もう一ヶ月も話してるんだぜ。」と、点灯人が言った。

「一ヶ月？」

「そうだよ。30分、だから、30日さ。やあ、こんばんは。」点灯人は、また街灯に火をつけた。

王子様は、相手の顔をじっと見た。そして、こんなにも命令をよく守る点灯人が好きになった。王子様は、夕暮れを見たいとき、自分から椅子を動かしていたことを思い出した。

王子様は、この友達を助けたかった。

「ねえ、休みたい時に休めるこつ、知ってるよ。」

「いつだって休みたいよ！」と、点灯人が言った。

人っていうのは、真面目にやっても、怠けたいものなんだ。

王子様は、言葉を続けた。

「君の星は、本当に小さいんだから、3歩歩けば、ぐるりっと回ってしまえるよ。相当ゆっくり歩いてさえいたら、しょっちゅうお日様を眺めていられるわけだよ。休みたくなったら、歩くんだな。そしたら、君がほしいが思うだけ、昼間が続くよ。」

「そうしたかたって、俺は大して助からないなあ。俺がこの世で好きなのは、眠ることだよ。」

「そりゃ困ったね。」と、王子様は言った。

「うん、困ったよ。やあ、おはよう。」そして、点灯人は、街頭の火を消した。

おうじさま  
王子様は、ずっととお たび つづ  
旅を続けながら、こんなふうにおも

あの人、ほかのみんなから、ば か  
馬鹿にされるだろうな。おうさま うぬぼ おとこ おおざけの  
じつぎょうか  
実業家から。でも、ぼく  
僕からしてみれば、たったひとり  
一人、あの人だけは、へん おも  
変だと思わなかつた。それっていうのも、もしかすると、あの人<sup>ひと</sup>が自分<sup>じぶん</sup>じゃないことのために、あくせく  
していたからかも。

おうじさま ざんねん  
王子様は残念そうにため息をついた。さらに かんが  
考える。

ひとり  
たった一人、あの人<sup>ひと</sup>だけ、僕は友達<sup>ともだち</sup>になれるとおも  
思った。でも、あの人<sup>ひと</sup>の星<sup>ほし</sup>は、ほんとう  
ちい  
に小さすぎて、ふたり はい  
二人も入らない…ただ、おうじさま  
王子様としては、そうとは思いたくなかつた  
んだけど、じつ  
実は、この星<sup>ほし</sup>のことも、ざんねん おも  
残念に思っていたんだ。だって、なんといっても、  
じかん  
24時間に1440回も夕暮れ<sup>ゆうぐ</sup>が見られるっていう、めぐ  
恵まれた星<sup>ほし</sup>なんだから。

## Chapter15 第十五章

六番目の星は、前の星より 10 倍大きかった。そこには分厚くて大きな本を書く  
老紳士が住んでいた。王子さまを見かけると、「おや、探検家がやってきた。」と大声で  
言った。

王子さまは机に腰掛け、息をついた。随分旅をしてきたものだ。

「あんた、どこから来たのかい？」と、老紳士は王子様は言った。

「その大きな本は何？ ここで何をしているの？」と、王子様が言った。

「わしは地理学者だ。」と、老紳士が言った。

「地理学者って？」

「海や川や、砂漠がどこにあるのか、そんなことを知ってる学者のことだよ。」

「そりゃ面白いなあ、本当に、そんなのが、本当の仕事ですよ！」

そういつて、王子様は自分の周りの星の上に、チラと目をやった。けど、まだ一度  
も、こんなにも堂々とした星を、見たことがなかった。

「あなたの星、とても綺麗ですね。海がありますか、ここには。」

「知らんよ、そんなこと。」と、地理学者が言った。

「へえ…」王子様はがっかりした。「じゃあ、山は？」

「知らんよ、そいつも。」と、地理学者が言った。

「じゃあ、町だの、川だよ、砂漠だのってものは？」

「それも知らんよ。」

「だって、地理学者でしょう？」

「そりゃそうだ。だが、わしは探検家じゃない。探検家なんか、わしには全くご縁  
がないよ。地理学者は、町や川や、山や海や、大きな海や、大海原や砂漠や数えに  
行くことはない。とても大切な仕事をしてるんだから、そこらをぶらついてなんかおら  
れんのだ。自分の机を離れることはない。そのかわり、探検家を迎えるんだ。探検家  
が来たら、いろいろな報告を受けて、相手の話をノートに取る。そして、相手の話を  
面白く思ったら、地理学者というものは、その探検家が正直者かどうかを調べ

るんだ。」

「どうして？」

「もし、探検家<sup>たんけんか</sup>が嘘<sup>うそ</sup>をついたら、地理<sup>ちり</sup>の本<sup>ほん</sup>がトンチンカンにならんとも限<sup>かぎ</sup>らんからね。探検家<sup>たんけんか</sup>がやたら酒<sup>さけ</sup>を飲<sup>の</sup>んでも、やっぱり同<sup>おな</sup>じことだよ。」

「どうして？」と、王子様<sup>おうじさま</sup>が言<sup>い</sup>った。

「どうしてって、大酒飲<sup>おおざけ</sup>みのやつには、物<sup>もの</sup>が二<sup>ふた</sup>つに見<sup>み</sup>えるからさ。すると、地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者は、山<sup>やま</sup>がひとつしかないところに、二<sup>ふた</sup>つあると書<sup>か</sup>くだろうじゃないか。」

「僕<sup>ぼく</sup>、悪<sup>わる</sup>い探検家<sup>たんけんか</sup>になりそうな人<sup>ひと</sup>、知<sup>し</sup>ってますよ。」

「うん、そんなこともあるものだ。だから、地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者<sup>たけんか</sup>というものは、この探検家<sup>たんけんか</sup>は、素性<sup>すじょう</sup>が良<sup>よ</sup>さそうだと思うと、その人<sup>ひと</sup>の発見<sup>はっけん</sup>したことの調<sup>ちようさ</sup>査<sup>さ</sup>をやるのだ。」

「見<sup>み</sup>に行<sup>い</sup>くの？」

「いや、見<sup>み</sup>には行<sup>い</sup>かんよ。そんなこと、面倒<sup>めんどう</sup>くさいさ。しかし、探検家<sup>たんけんか</sup>から、いろん<sup>しょうこ</sup>な証<sup>しやうこ</sup>拠<sup>も</sup>を持<sup>だ</sup>ち出<sup>た</sup>してもらうんだよ。例<sup>たと</sup>えば、大<sup>おお</sup>きな山<sup>やま</sup>を発<sup>はっけん</sup>見<sup>けん</sup>したというんだったら、いくつも、大<sup>おお</sup>きな石<sup>いし</sup>を持<sup>も</sup>ってきてもらうわけだ。」

地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者は、不意<sup>ふい</sup>にワクワクしだした。

「そうだ、君<sup>きみ</sup>は遠<sup>とお</sup>くから来<sup>き</sup>たんだな。探検家<sup>たんけんか</sup>だ。さあ、わしに、君<sup>きみ</sup>の星<sup>ほし</sup>のことを喋<sup>しゃべ</sup>ってくれないか。」

そうやって、地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者はノートを開<sup>ひら</sup>いて、鉛筆<sup>えんぴつ</sup>を削<sup>けず</sup>った。地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者<sup>たけんか</sup>というものは、探検家<sup>たんけんか</sup>の 話<sup>はなし</sup>をまず、鉛筆<sup>えんぴつ</sup>で書<sup>か</sup>き留<sup>と</sup>める。それから、探検家<sup>たんけんか</sup>が信<sup>しん</sup>じられるだけのものを 出<sup>だ</sup>してきたら、やっ<sup>か</sup>とインクで書<sup>と</sup>き留<sup>と</sup>めるんだ。

「それで？」と、地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者は待<sup>ま</sup>ち遠<sup>とお</sup>しそうに言<sup>い</sup>った。

「ええと、僕<sup>ぼく</sup>のう<sup>たい</sup>ちですか。大<sup>おもしろ</sup>して面<sup>ほし</sup>白<sup>し</sup>いところじゃありません。ちい<sup>ほし</sup>ちやい星<sup>し</sup>な<sup>ほし</sup>んです。

火山<sup>かざん</sup>が三<sup>みつ</sup>つあります、活<sup>かつ</sup>火山<sup>かざん</sup>が二<sup>ふた</sup>つと、死<sup>しか</sup>火山<sup>ざん</sup>が一<sup>ひとつ</sup>つ。でも、いつ爆<sup>ばく</sup>発<sup>はつ</sup>するかわ<sup>かわ</sup>りませんよ。」

「うん、そりゃわからん。」と、地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者<sup>い</sup>が言<sup>い</sup>った。

「花<sup>はな</sup>も一<sup>ひとつ</sup>つあるんです。」

「わしたちは、花<sup>はな</sup>のことなんか、書<sup>か</sup>かないよ。」

「どうしてなの？ 一<sup>いち</sup>番<sup>ばん</sup>綺麗<sup>きれい</sup>だよ。」

「花<sup>はな</sup>っていうものは、儚<sup>はかな</sup>いものなんだからね。」

「儚<sup>はかな</sup>いって？」

「地理<sup>ちり</sup>の本<sup>ほん</sup>はなあ、」と、地理学<sup>ちりがくしゃ</sup>者<sup>い</sup>は言う。「すべ<sup>なか</sup>て<sup>いちばん</sup>の中で一<sup>いち</sup>番<sup>ばん</sup>ちゃんとしておる。

ぜ<sup>ぜ</sup>った<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>絶<sup>ぜ</sup>対<sup>たい</sup>古<sup>こ</sup>くな<sup>な</sup>った<sup>た</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>ない<sup>い</sup>から<sup>ら</sup>の<sup>う</sup>。山<sup>やま</sup>が動<sup>うご</sup>いた<sup>た</sup>り<sup>り</sup>する<sup>る</sup>なん<sup>め</sup>か<sup>め</sup>滅<sup>め</sup>多<sup>た</sup>に<sup>い</sup>ない、大<sup>お</sup>海<sup>うな</sup>原<sup>ばら</sup>が

干<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>がる<sup>る</sup>なん<sup>め</sup>か<sup>め</sup>滅<sup>め</sup>多<sup>た</sup>に<sup>い</sup>ない。わしたちは、変<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ない<sup>い</sup>もの<sup>の</sup>を<sup>を</sup>書<sup>か</sup>く<sup>く</sup>の<sup>だ</sup>。」

王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>様<sup>さま</sup>は、横<sup>よこ</sup>から<sup>くち</sup>口<sup>だ</sup>を出<sup>で</sup>した。

「でも、死<sup>しか</sup>火<sup>ざん</sup>山<sup>ざん</sup>だ<sup>だ</sup>った、目<sup>め</sup>を<sup>さ</sup>覚<sup>さ</sup>め<sup>め</sup>す<sup>す</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>よ。儚<sup>はかな</sup>い<sup>い</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>なん<sup>の</sup>の<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>？」

「火<sup>か</sup>山<sup>ざん</sup>が<sup>ねむ</sup>眠<sup>め</sup>っ<sup>め</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>よう<sup>う</sup>と、目<sup>め</sup>を<sup>さ</sup>覚<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>よう<sup>う</sup>と、わしたち<sup>おな</sup>に<sup>おな</sup>と<sup>と</sup>っ<sup>っ</sup>ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>、同<sup>おな</sup>じ<sup>じ</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>

だ<sup>だ</sup>よ。」

わしたち<sup>もん</sup>が<sup>だ</sup>問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>に<sup>に</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>は、山<sup>やま</sup>だ。山<sup>やま</sup>は<sup>か</sup>変<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>から<sup>ら</sup>ね。」

「だ<sup>は</sup>け<sup>は</sup>ど、儚<sup>はかな</sup>い<sup>い</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>なん<sup>の</sup>の<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>？」一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>何<sup>な</sup>か<sup>か</sup>聞<sup>き</sup>き<sup>だ</sup>す<sup>す</sup>と、し<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>ら

れ<sup>れ</sup>ない<sup>い</sup>王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>様<sup>さま</sup>が、繰<sup>く</sup>り<sup>かえ</sup>返<sup>かえ</sup>した。

「そ<sup>き</sup>り<sup>き</sup>ゃ、そ<sup>き</sup>の<sup>き</sup>う<sup>き</sup>ち<sup>き</sup>消<sup>い</sup>え<sup>い</sup>て、な<sup>い</sup>く<sup>い</sup>な<sup>い</sup>る<sup>い</sup>っ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>だ<sup>だ</sup>よ。」

「僕<sup>ぼく</sup>の<sup>はな</sup>花<sup>はな</sup>、そ<sup>き</sup>の<sup>き</sup>う<sup>き</sup>ち<sup>き</sup>消<sup>い</sup>え<sup>い</sup>て、な<sup>い</sup>く<sup>い</sup>な<sup>い</sup>る<sup>い</sup>の<sup>の</sup>？」

「う<sup>う</sup>ん、そ<sup>う</sup>う<sup>う</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>も。」

「僕<sup>ぼく</sup>の<sup>はな</sup>花<sup>はな</sup>は<sup>はな</sup>儚<sup>はかな</sup>い<sup>い</sup>花<sup>はな</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>か。身<sup>み</sup>の<sup>まも</sup>守<sup>い</sup>り<sup>い</sup>と<sup>と</sup>言<sup>よ</sup>っ<sup>よ</sup>たら<sup>ら</sup>、四<sup>よ</sup>つ<sup>と</sup>の<sup>と</sup>棘<sup>とげ</sup>しか<sup>も</sup>持<sup>も</sup>っ<sup>も</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ない。そ

れ<sup>はな</sup>な<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>に、あ<sup>ぼく</sup>の<sup>ぼく</sup>花<sup>はな</sup>を<sup>ほし</sup>僕<sup>ひとり</sup>の<sup>ひとり</sup>星<sup>ほし</sup>に、一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひとり</sup>ぼ<sup>ひとり</sup>っ<sup>ひとり</sup>ち<sup>ひとり</sup>に<sup>ひとり</sup>し<sup>ひとり</sup>て<sup>ひとり</sup>き<sup>ひとり</sup>た<sup>ひとり</sup>ん<sup>ひとり</sup>だ。」

と、王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>様<sup>さま</sup>は<sup>かん</sup>考<sup>かん</sup>え<sup>かん</sup>た<sup>かん</sup>。王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>様<sup>さま</sup>は<sup>はじ</sup>初<sup>はじ</sup>め<sup>はじ</sup>て、あ<sup>はな</sup>の<sup>なつ</sup>花<sup>はな</sup>が<sup>なつ</sup>懐<sup>なつ</sup>か<sup>なつ</sup>し<sup>なつ</sup>く<sup>なつ</sup>な<sup>なつ</sup>った。そ<sup>げん</sup>れ<sup>げん</sup>ど<sup>げん</sup>も、元<sup>げん</sup>気<sup>き</sup>

と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>ど<sup>ど</sup>き<sup>き</sup>を<sup>き</sup>取<sup>き</sup>り<sup>き</sup>戻<sup>もど</sup>し<sup>もど</sup>て<sup>もど</sup>聞<sup>き</sup>いた。

「僕<sup>ぼく</sup>、今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>は、ど<sup>ほし</sup>こ<sup>けん</sup>の<sup>ぶつ</sup>星<sup>ほし</sup>を<sup>けん</sup>見<sup>けん</sup>物<sup>ぶつ</sup>し<sup>けん</sup>たら<sup>けん</sup>い<sup>けん</sup>い<sup>けん</sup>で<sup>けん</sup>し<sup>けん</sup>ょう<sup>けん</sup>か<sup>けん</sup>ね？」

「地<sup>ち</sup>球<sup>きゅう</sup>の<sup>けん</sup>見<sup>けん</sup>物<sup>ぶつ</sup>し<sup>けん</sup>な<sup>けん</sup>さい。な<sup>ひ</sup>か<sup>ひ</sup>な<sup>ひ</sup>か<sup>ひ</sup>評<sup>ひ</sup>判<sup>はん</sup>の<sup>ほし</sup>い<sup>ほし</sup>星<sup>ほし</sup>だ。」と、地<sup>ち</sup>理<sup>り</sup>学<sup>がく</sup>者<sup>しゃ</sup>が<sup>こた</sup>答<sup>こた</sup>え<sup>こた</sup>た。

王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>様<sup>さま</sup>は<sup>と</sup>遠<sup>と</sup>く<sup>のこ</sup>に<sup>はな</sup>残<sup>おも</sup>し<sup>おも</sup>て<sup>おも</sup>き<sup>おも</sup>た<sup>おも</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>あと</sup>こ<sup>あと</sup>と<sup>あと</sup>を<sup>あと</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>おも</sup>な<sup>おも</sup>が<sup>おも</sup>ら、そ<sup>あと</sup>こ<sup>あと</sup>を<sup>あと</sup>後<sup>あと</sup>に<sup>あと</sup>し<sup>あと</sup>た。

## Chapter16 第十六章

そんなわけで、七番目の星が地球だった。この地球というのは、どこにでもある星なんかじゃない。数えてみると、王様が（もちろん、黒い顔の王様も入れて）110人、地理学者が7000人、実業家が90万人、大酒飲みが750万人、自惚れが3億1千100万人で、合わせて大体20億の大人の人がいる。

地球の大きさをわかりやすくする、こんな話がある。電気が使われるまでは、六つの大陸ひっくるめて、なんと、46万2511人もの、大勢の点灯人がいなきゃならなかった。

遠くから眺めると、大変見ものだ。この大勢の動きは、バレエのダンサーみたいに、きちっきちっとしていた。

まずはニュージーランドとオーストラリアの点灯人の出番が来る。そこで、自分のランプをつけると、この人たちは眠りにつく。すると、次は中国とシベリアの番が来て、この動きに加わって、終わると、裏に引っ込む。それから、ロシアとインドの点灯人の番になる。

次はアフリカとヨーロッパ。それから南アメリカ、それから北アメリカ。しかも、この人たちは、自分の出る順を、絶対に間違えない。

でも、北極にひとつだけ、南極にもひとつだけ、街灯があるんだけど、そのふたり二人の点灯人は、のんびんだらりとした毎日を送っていた。だって、一年に二回、働くだけでいいんだから。

## Chapter17 第十七章

うまく言おうとして、ちょっと嘘をついてしまうことがある。点灯人のことも、全部ありのままってわけじゃないんだ。そのせいで、何も知らない人に、僕らの星のことを変に教えてしまったかもしれない。地球のほんのちょっとしか、人間ものじゃない。地球に住んでる20億のひとに、まっすぐ立ってもらって、集みたいに寄り集まってもらったら、わけもなく、縦30キロ、横30キロの広場に収まってしまう。太平洋で一番ちっちゃい島にだって、入ってしまうはずだ。

でも、大人の人に、こんな事を言っても、やっぱり信じない。いろんなところが、自分たちのものだって思いたいんだ。自分たちはバオバブくらいでっかいものなんだって、考えている。だから、その人たちに、「数えてみてよ」って、いってごらん。数字が大好きだから、きっと嬉しいがる。でも、みんなはそんなつまらない事で、時間をつぶさないように。

くだらない。みんな、僕を信じて。

地球についての王子様は、人っ子一人いないことに、驚いた。もしかして、星を間違えたかなって、不安になってきた。その時、月色の輪が、砂の中でほどけた。王子様は一応、声をかけてみた。

「こんばんは。」

「こんばんは。」

「この星は何という星？」

「地球だよ、アフリカさ。」

「そうか、それじゃ、地球には誰もいないの？」

「ここは砂漠だからね。砂漠には誰もいない。地球は大きいんだよ。」

王子さまは岩に座って、空を見上げた。

「星がきらきら光っているのは、旅をしている僕たち皆が、いつか自分の星に帰る時、すぐに見つかるようにかな。見て、あれが僕の星、ちょうど真上にある。でも、なんて遠いんだ。」

「<sup>きれい</sup> <sup>ほし</sup>な<sup>ちきゅう</sup> <sup>き</sup>星だね。なぜ地球に來たんだい？」

「<sup>ぼく</sup> <sup>はな</sup>僕、花とうまくいっていないんだ。」

「そうか。」

「<sup>にんげん</sup>人間はどこ？ <sup>さばく</sup>砂漠ってちょっと<sup>さび</sup>寂しいよね。」

「<sup>にんげん</sup>人間が居ても<sup>さび</sup>寂しいさ。」

「<sup>きみ</sup>君って<sup>か</sup>変わった<sup>い</sup>生き<sup>もの</sup>物だね。<sup>ゆび</sup>指<sup>ほそ</sup>みたい<sup>に</sup>に細くて。」

「でも、<sup>おうさま</sup>王様の<sup>ゆび</sup>指よりずっと<sup>つよ</sup>強いんだよ。」

「そんなに強いはずはないよ。<sup>あし</sup>足もないし、<sup>たび</sup>旅もできないじゃない。」

「<sup>わたし</sup>私は<sup>ふね</sup>船より<sup>とお</sup>遠くにお前を<sup>まえ</sup>連れて<sup>つ</sup>行<sup>おこな</sup>ける。」

<sup>へび</sup>蛇は、<sup>きん</sup>金の<sup>おうじ</sup>ブレスレットのように<sup>あし</sup>王子さまの<sup>ま</sup>足<sup>つ</sup>首に巻き付いた。

「<sup>わたし</sup>私は<sup>ふ</sup>触れたものを<sup>みなつち</sup>皆土へと<sup>かえ</sup>返してやる。しかしお前は<sup>まえ</sup>純<sup>じゅん</sup>粋<sup>すい</sup>無<sup>む</sup>垢<sup>く</sup>で、<sup>ほし</sup>星からやっ

てきたという。」

「<sup>おうじ</sup>王子さまは何も<sup>なに</sup>答<sup>こた</sup>えなかった。」

「<sup>かわい</sup>可愛<sup>いわ</sup>そうに。この<sup>ほし</sup>岩だらけの<sup>まへ</sup>星で、お前は<sup>よわ</sup>かくも弱い。いつか、<sup>じぶん</sup>自分の<sup>ほし</sup>星が<sup>こい</sup>恋し

くてたまらなくなったら、<sup>わたし</sup>私が<sup>ちから</sup>力<sup>か</sup>を貸してやろう。」

「わかったよ。でも、どうして<sup>きみ</sup>君はいつも<sup>なぞ</sup>謎<sup>はな</sup>めいた<sup>かた</sup>話し方をするの？」

「<sup>わたし</sup>私には<sup>すべ</sup>全ての<sup>なぞ</sup>謎<sup>と</sup>が解けるからさ。」

そして、<sup>だま</sup>どちらも<sup>こ</sup>黙<sup>こ</sup>り込んだ。



## Chapter18 第十八章

おうじさまは、さばくわたったけど、たった一輪の花に出くわしただけだった。花びらが  
みつだけの花で、なんのとり柄もない花。

「こんにちは。」と、おうじさまは言う、「こんいちは。」と、花が言った。

「人はどこにいますか。」と、おうじさまは丁寧<sup>ていねい</sup>に尋ねた。

「ひと？ いると思う、6人か7人。何年か前<sup>なんねん</sup>に見かけたから。でも、どこに会える  
か、全然<sup>ぜんぜん</sup>わかんない。風<sup>かぜ</sup>まかせだもん。あの人<sup>ひと</sup>たち、根っこがないの。それって随分<sup>ずいぶん</sup>  
不便<sup>ふべん</sup>ね。」

「さようなら。」と、おうじさまは言う、「さようなら。」と、花が言った。

## Chapter19 第十九章

おうじ たか やま のぼ  
王子さまは高い山に登った。これまで山と言え、ひざ たか みつ かざん し  
らなかつた。死火山は腰掛代わりに使っていた。

こんなに高い山からなら、この星も人間も全て一目で見渡せるぞ。

しかし見えたのは、針のように 鋭く切りたった岩山の 頂 ばかりだった。

「こんにちは。」と、おうじさま べつ い  
王子様は別にあてもなく言った。

「こんにちは。」と、こだまが答えた。

「あなたは誰？」と、おうじさま い  
王子様が言った。

「あなたは誰？」と、こだまは答えた。

「ぼく ともだち  
僕の友達になってよ。僕、寂しいんだ。」

「ぼく さび  
僕、寂しいんだ。」と、こだまは答えた。

おうじ し かんが  
王子さまはそれがこだまだと知らなかったの、こう 考 えた。

へん ほし かわ とがり しおから にんげん そうぞうりよく  
変な星だな。どこもかしこも乾いていて、尖 がっていて、塩辛い。人間には 想 像 力  
がなく、いわれたことを繰り返すだけ。僕の星には花が咲いていた。あの花はいつも  
さき はな  
先に話しかけてきた。